

戦場に捧げた青春

—旧北ベトナムにおける「青年突撃隊」隊員たちのベトナム戦争—

今井 昭夫

目次

はじめに

I 聞き取り調査の実施

II 青年突撃隊の設立と発展

III 青年突撃隊の編成と活動

IV 青年突撃隊に入隊した経緯

V 総動員体制の階層性

VI 復員後の青年突撃隊女性隊員

おわりに

はじめに

本稿では、「青年突撃隊 (Đội Thanh Niên Xung Phong)」という準軍事組織を通してベトナム戦争期の旧北ベトナム (ベトナム民主共和国) において、どのように戦時総動員体制が取られてきたのか、また隊員たちの復員後にいかなる問題が生じたのかの一端を考察する。

ベトナム戦争期の人民軍隊を中心とした旧北ベトナムにおける総動員体制やそのベトナム的形態である「人民戦争」については既に小高泰氏などの研究¹があるが、青年突撃隊のような準軍事組織についての本格的な研究はまだ行われていない。正規軍に入隊できなかった青年たち、たとえば体の弱い若い男性とか、正規兵となる

ことが少なかったと思われる女性たちは、旧北ベトナムではどのようなかたちで戦争への参加をしていたのだろうか。本稿で扱う青年突撃隊は正規の軍隊ではないが、ベトナム戦争期には10代後半から20代の青年を「志願制」で募集し編成され、直接の戦闘には従事しないものの、軍隊の後方支援や道路・橋梁建設などを任務とした準軍事組織であった。しかし青年突撃隊が駐屯していた所は完全な「銃後」ではなく、戦略的に重要な交通の要衝地などで爆撃の対象ともなる広い意味での戦場であった。本稿では

「青年突撃隊」という準軍事組織を通して、「前線」と「銃後」のいわば中間領域への人民動員のありようを見ていく。ベトナム戦争期、青年突撃隊には種々の理由で人民軍隊に入隊しなかった、あるいは入隊できなかった青年男女20万人以上が参加した。この組織は、人民軍隊や民兵・ゲリラとはまた異なったかたちで、当時の旧北ベトナムの青年たちを戦場へと動員する有力な枠組みとなったのである。

ベトナム戦争期の北ベトナムでは女性でも軍隊に入隊することがあったが、軍隊に入隊すると通常は長期間にわたっての出征を余儀なくされるので、女性は年限のある (通常3年) 青年突撃隊、もしくは地元の民兵・ゲリラに参加す

¹ 小高泰『ベトナム人民軍隊 知られざる素顔と軌跡』暁印書館、2006年。

るケースが多かった。軍隊に入った女性はたい
てい医療、連絡、後方支援の業務に携わり、北
部などで3年間勤務して復員した。中には長期
間戦場において戦争終結後によりやく復員した女
性も若干いた。ベトナム戦争期の女性動員につ
いての研究としてはカレン・G・ターナーの『女
性でさえも戦わねばならなかった』²などの研究
があるが、本稿のように特に青年突撃隊に焦点
をしばったものではない。また女性の戦争動員
に関する従来の研究では復員の契機については
殆ど関心が払われていない³。ベトナムの南部女
性博物館編の『抗戦南部女性史』⁴はまさにその
一例である。本稿では、青年突撃隊の女性隊員
が戦争に動員されたがゆえに生じた復員後の問
題についても若干考察したい。

ベトナム戦争に関する公式的 (official) な「戦
争の記憶」は、修史 (戦史、共産党史など) や
歴史教科書などにおいて、あるいは種々の政治
的集会や記念式典の場などで、国家の荣誉ある
勝利や偉大な国家的大義のために殉じて戦死し
た兵士の犠牲的精神を讃える厳粛な語りとして
存在してきた。在米のベトナム系監督トリン・
T・ミンハの映画「姓はヴェト、名はナム」(1989
年) は、そのような「公式的記憶」の「構築性」

を浮き彫りにし、また伊藤哲司氏の研究⁵は戦争
中の「楽しい」記憶や女性や南部人の記憶など
ベトナム国内で語られる「戦争の記憶」の多様
なあり方を明らかにしている。筆者も、ここ数
年、上述のような「公式的記憶」だけに収まり
きらない「戦争の記憶」を掘り起こそうとベト
ナム国内で聞き取り調査を行なってきた。本稿
は、筆者が2006年の8月末から9月初頭につ
いて、ベトナム北部のハノイ市、ハタイ省、タイ
ンホア省で元青年突撃隊員だった人々、30人近
くの聞き取り調査の結果をまとめたものである。
本稿では、元青年突撃隊員への聞き取り調査
の中で単に語り手本人のみからではなく同席者
など第三者からも聴取できた世間話や俗言・茶
化しのようなヴァナキュラーな記憶についても
ふれ、青年突撃隊をめぐる重層的で多声的な記
憶のあり方を示してみたい。

² Karen Gottschang Turner with Phan Thanh Hao, *Even the Women must fight: Memories of War from North Vietnam*, John Wiley & Sons, Inc. New York etc., 1998.

³ この点については、次の文献から示唆を受けた。野上元『戦争体験の社会学 「兵士」という文体』弘文堂、2006年、p.38.

⁴ Tổ Sử Phụ Nữ Nam Bộ Bảo Tàng Phụ Nữ Nam Bộ, *Lịch Sử Phụ Nữ Nam Bộ Kháng chiến*, Nhà Xuất Bản Chính Trị Quốc Gia, Hà Nội, 2006.

⁵ 伊藤哲司「ベトナム戦争の記憶と語り」『茨城大学人文学部紀要 (人文学科論集)』第36号、2001年。pp.29-50. 同「ベトナム人女性の戦争の語り—3人の女性の物語とベトナム社会—」『女性史学』第12号、2002年。pp.34-44.

リスト1

番号	名前	性別	年齢	入隊期間	備考
1	マイー	女	58歳	1965年～1969年	男兄弟のいない4人姉妹
2	シン	女	59歳	1965年～1967年	当時、母子3人暮らしで、妹は12歳。
3	ドゥオック	男	59歳	1966年～1969年	養子先では一人っ子
4	フォン	男	60歳	1965年～1969年	徴兵検査不合格
5	ルイ	女	53歳	1971年～1973年	兄が徴兵検査不合格で、その代わりに。
6	ルー	男	66歳	1970年～1973年	軍隊経験あり。地方幹部から指導者として参加。

I. 聞き取り調査の実施

ベトナムでの聞き取り調査はいずれも旧北ベトナムに属す3つの省・直轄市で実施した。ハノイ市近郊で2ヶ所ともう1ヶ所はハノイから南に自動車で3時間ほどのタインホア省である。タインホア省では4地点でインタビューした。聞き取り調査にはベトナム国家人文社会科学センター・社会学研究所研究員のファム・スアン・ダイ (Phạm Xuân Đại) 氏が同行し、インタビューはベトナム語で行なった⁶。

1. ハノイ市ザーラム (Gia Lâm) 県イエントゥオン (Yên Thường) 社イエンケー (Yên Khê) 村、インタビュー対象者6人、調査日2006年8月30日・31日 (リスト1)

イエントゥオン社はハノイ市郊外 (東側) の田園地帯にあり、市内へはオートバイで1時間ほどの通勤圏内にある。聞き取り調査はイエントゥオン社人民委員会の協力をえて行

なわれた。イエントゥオン社は都市近郊農村で、農業では米と野菜が主に栽培されていて、農家の平均所得は1ヶ月当たり30～40万ドンだという。人口はおよそ1万5000人で世帯数は3300。面積は850ヘクタールで、10の村 (thôn) がある。共産党党員は約550人、退役軍人は約500人いる。元青年突撃隊隊員は約80人いる。上のリスト1はインタビューした元青年突撃隊隊員6名である。氏名は姓とミドルネームを省略し、名前だけを記している。年齢は調査時点のもの。

上の6人のうち、6番のルーだけは他の5人と異質である。彼は1960年から1963年に軍隊にいた経験があり、復員後、合作社主任など地方幹部となり、1970年から青年突撃隊の指導者の一人 (大隊の政治員) として赴任した。彼には自転車と通信機が支給され、手当ても普通の隊員が1ヶ月5ドン (女性は石鹸代が付加され5.5ドン) なのに対し45ドンと段違いに多額の手当てを受領していた。

イエントゥオン社の調査に際しては、ブイ・ティエン・ホアさん (夫) とグエン・テ

⁶ これらの録音テープとテープ起こされたベトナム語原稿は、21世紀COE「史資料ハブ地域文化研究」の事業の一環としてオーラルアーカイヴに保存される予定である。

ィ・ホアさん（妻）のお宅を調査基地および休憩所として使用させていただいた。ホアさん夫婦の家族は4人（夫婦と子供2人）で、お宅はイエンケー村にある。イエンケー村は人口が約1700人で、世帯数は約400である。このご夫妻からも元青年突撃隊隊員についていろいろと興味深いお話を伺うことができた。

2. ハタイ省ハドン（Hà Đông）市キエンフオン（Kiến Hưng）社マウルオン（Mẫu Lương）村、調査日2006年9月2日（リスト2）

キエンフオン社はハノイの中心部からオートバイで30分ほど南東に行ったところに位置した郊外の農村ではあるが、家並みはハノ

イ市内からほぼ途切れることなく続いている。キエンフオン社は北爆による大きな被害を受けたことがあり、その犠牲者の慰霊碑が建てられている。聞き取り調査は、協力者のファム・スアン・ダイ氏の親しい戦友がマウルオン村に在住しており、その戦友に地元の元隊員を紹介していただき、インタビューした。

9番（リスト2）のホンについてであるが、インタビューの中では言及されることはなかったが、彼の肌の色があまりに黒かったので訝しく思い、協力者のダイ氏に尋ねると、抗仏戦争中にフランスの黒人兵とベトナム人の母との間にできた子供だという。ホン本人の弁によれば、青年突撃隊に入隊したのは、
が、彼の肌の色があまりに黒かったので訝

リスト2

番号	名前	性別	年齢	入隊期間	備考
7	トゥオン	女	59歳	1966年～1976年	「青年団の呼びかけに応じて登録」
8	ティエップ	女	54歳	1969年～1971年	男兄弟がいない3人姉妹
9	ホン	男	58歳	1966年～1971年	フランスの黒人兵とベトナム人との混血児。

しく思い、協力者のダイ氏に尋ねると、抗仏戦争中にフランスの黒人兵とベトナム人の母との間にできた子供だという。ホン本人の弁によれば、青年突撃隊に入隊したのは、「党の呼びかけや青年団の呼びかけに応じて」が理由だとされているが、体も壮健な彼が人民軍隊ではなく青年突撃隊に入隊したのは、混血児であったことが理由の一つであったと思わ

れる⁷。

⁷ 筆者は、2005年9月11日、台湾出身の日本軍軍属で戦後もベトナムに残留し、現在ニンビン省に在住の呉連義氏夫妻にインタビューしたことがある。呉連義氏とベトナム人女性との間に生まれた息子もベトナム戦争中、人民軍隊に入隊することはできなかった。

リスト3-1

番号	名前	性別	年齢	入隊期間	備考
10	カップ	女	63歳	1965年～1969年	父が家にいず、母が早く亡くなり、兄嫁との生活に困窮。
11	ラム	男	61歳	1965年～1970年	3人兄弟で、1人の兄は戦死。1人は負傷兵。
12	グエット	女	56歳	1971年～1974年	両親は早く亡くなり、兄弟に育てられる。兄嫁と暮らしていて、参加
13	クイ	男	62歳	1965年～1970年	徴兵検査不合格。
14	クエット	男	62歳	1965年～1969年	徴兵検査不合格。
15	タン	女	60歳	1965年～1968年	「兵士の写真が素敵だったので、学校をやめて参加」

3-1. タインホア省クアンズオン (Quảng Xương) 県クアンティン (Quảng Thịnh)

社、調査日 2006 年 9 月 5 日

タインホア省は青年突撃隊のいわば牙城である。青年突撃隊隊員だった人が全国で最も多く存在し、最も早くに抗米救国の為の青年突撃隊が組織されている。全国の青年突撃隊員数の約 4 分の 1 をタインホア省が占めている (抗仏期が 1 万 8000 人。抗米期が 4 万 3000 人)。ベトナム戦争終結後に最も早く、青年突撃隊・元隊員の組織化が行なわれたのもタインホア省である。現在、タインホア省には、元隊員が 2 万 5480 人いる⁸。タインホア省における青年突撃隊員の「傷病兵」は 4200 人、「烈士 (戦死者)」は 821 人、1 度だけの手当て受給者が 1 万 5485 人、定期的な手当て受給者が 1521 人である⁹。タインホア省での聞き

取り調査は、タインホア省「旧青年突撃隊」と 3 ケ所の社の人民委員会の協力をえた。

リスト 3-1 の 6 人へのインタビューはクアンティン社の人民委員会・会議室においてグループ・インタビューの形式で行なわれた。6 人は同じ部隊に属し、クアンビン省に駐屯していた。

クアンティン社は、タインホア市から南へ車で 15 分ほどのところに位置する農村である。現在の人口が約 5800 人。ベトナム戦争期に青年突撃隊に入隊したのはおよそ 120 人で、現在の生存者は 80 人である (男 42 人、女 38 人)。15 人が「傷病兵」で、3 人の女性が未婚のままである。

⁸ Trần Đình Lang, “Bài Phát Biểu Của Đồng Chí Trần Đình Lang – Trưởng Đoàn Đại Biểu Cựu TNXP Thanh Hóa Tại Đại Hội Đại Biểu Toàn Quốc Thành Lập Hội Cựu TNXP Việt Nam (18-19/12/2004)”, *Thanh niên xung phong THANH HÓA*, số 1/2005, pp.26-27.

⁹ *Ibid.*, pp.28-29. すなわち定期的手当て (恩給) を受給している人は元隊員全体の約 6% 程度である。今回インタビューした全員のうち、通常の恩給を受給していると明言している人はいなかった。負傷兵の恩給を受給していると明言している人は 3 人いた。マイーは 2001 年から受給、1 ヶ月 21 万 6 千

ドン。ラムは 25% の負傷兵で月に 25 万ドン。トゥオン (男) は 21% の負傷兵で月に 23 万 9000 ドン。

リスト3-2

番号	名前	性別	年齢	入隊期間	備考
16	トゥオン	男	61歳	1965年～1969年	不発弾処理。「負傷兵」
17	フン	男	55歳	1971年～1974年	除隊後、ブルドーザーやショベルカーの運転手に
18	ホイ	女	52歳	1972年～1974年	幹部の子弟。

リスト3-3

番号	名前	性別	年齢	入隊期間	備考
19	ウット	女	61歳	1965年～1972年	C213単位に所属。
20	リエン	女	53歳	1972年～1974年	夫婦とも隊員。家庭困窮。
21	ビン	女	53歳	1972年～1975年	家が近くにあり、通い。512総隊259隊C5所属
22	ズン	女	55歳	1972年～1975年	512総隊259隊C4所属
23	ドン	女	52歳	1972年～1975年	結婚して当地に来た。512総隊259隊B5所属
24	ラン	女		1972年～1975年	512総隊259隊C6所属
25	トーイ	女	56歳	1972年～1975年	家族なし。512総隊259隊C5所
26	グーイ	女		1969年～1972年	C31所属。
27	ザオ	女		1968年～1974年	未婚。養子をとる。
28	フィエン	女	52歳	1972年～1975年	農場代表。

3-2. タインホア省クアンスオン県クアンタ

ン (Quảng Tân) 社、調査日 2006 年 9 月 6 日 (リスト3-2)

クアンタン社は上記のクアンティン社とほぼ隣接している。クアンタン社は人口が約 9600 人、2340 世帯。所得のほぼ 4 割が農業収入で、貧困世帯が約 10% の 230 世帯 (そのうち 11 世帯が元青年突撃隊員) をしめる。共産党員が 363 人。「烈士 (戦死者)」は 225 人で、そのうち 5 人が青年突撃隊員。「傷病兵」は 130 人で、そのうち 30 人が青年突撃隊員。元青年突撃隊員は 215 人いて、6 人の女性が未婚のままである。

3-3. タインホア省ティエウホア県クアンタン

(Quảng Thắng) 社、1 グループ (代表 1 人)、調査日 2006 年 9 月 6 日 (リスト3-3)

このグループはリストの 28 番フィエンを代表とする乳牛農場のメンバーである。ベトナム戦争終結後に多くの元青年突撃隊員の女性が窮状に陥っているのをみて、フィエンが 2000 年に設立した農場 (3 ヘクタール) で働く 52 歳から 61 歳までの元青年突撃隊委員の女性たち 10 人のグループである。彼女らは女性だけで共同生活をしている。約 3 ヘクタールの土地をクアンタン社から借り受け、最初の 3 年間は給料の支払いもできなかったが初期の経営難をなんとか乗り越え、現在、メンバーに月に 30 万ドンの給与を支払えるまでになんとかこぎつけた。ここでの聞き取り調査は短時間で多くの人にインタビューしたので、入隊への経緯、青年突撃隊での活動など一人ひとりに詳しく話を聞くことはできなかった。

II. 青年突撃隊の設立と発展

以下では、青年突撃隊の成立から現在にいたるまでの歴史をたどる。その歴史は大きく4つの時期に分けることができる。(1) 抗仏戦争期の成立から土地改革期まで(1950～1957年)。(2) 空白期(1957～1965年)。(3) ベトナム戦争期(1965～1975年)。(4) ベトナム戦争終結から現在まで。

1. 抗仏戦争期における青年突撃隊設立

抗仏戦争期の1950年7月15日、ホー・チ・ミン主席が自ら青年突撃隊の成立を指示し、青年突撃隊は設立された。抗仏戦争の時、青年突撃隊は中央の中枢機関の防衛、革命の生命線となる交通ルートの建設と確保、食糧や武器の補給に貢献した。特にディエンビエンフーの戦い(1954年)では、正規軍、民工、少数民族と共に多大の労働力を提供し貢献した。現タインホア省「旧青年突撃隊会」主席のチャン・ディン・ランによれば、タインホア省では、当初、225人から始まり、1951年、1952年に急速に隊は発展し、1953年末から1954年初には、1万8400人の隊員を擁するようになった¹⁰。抗仏戦争末期のこのような動員・貢献に対して、当時のホー・チ・ミン主席は、1954年5月8日、幹部、戦士、民工、青年突撃隊、地方の少数民族同胞がディエン

ビエンフーでの輝かしい勝利を達成したことを讃える書簡を送っている。党機関紙『ニャンザン』の記事(1954年4月26-30日号)によれば、「抗戦に勝利し、建国に成功するために、全身全霊を祖国と人民に奉仕する多くの良き幹部を必要としている。現在、その幹部を養成するための大きくて良い学校が3つある。それは、人民軍隊、青年突撃隊、大衆発動隊(徹底した小作料引き下げと土地改革を実施)である」としている。ホー主席は青年突撃隊を「大きな学校」と呼んだ。この時期では、青年突撃隊は7年生、8年生、9年生の生徒から募集し、とりわけ貧雇農出身者を動員した。抗仏戦争終結後、青年突撃隊員だった人は学校や研修・訓練に派遣されたり、土地改革に参加したりした。これらの人はその後、労働者や幹部・公務員になっている。このように青年突撃隊は抗仏戦争期・土地改革期というベトナム民主共和国建国初期の動乱期において、貧雇農出身の青年男子を動員し、人民軍隊や大衆発動隊を補完する組織となった。土地改革が終了した1957年には青年突撃隊の解体命令が出され、隊員は配置転換され、工業区や交通運輸部門などの労働者となった。これで青年突撃隊の歴史はいったん途切れる。なお、抗仏期の青年突撃隊員は男性だけで、女性は含まれていない。

¹⁰ タインホア省では1950年～1955年に1万8900人が青年突撃隊に参加した。Trần Đình Lang, *op.cit.*, p.26.

2. ベトナム戦争期における青年突撃隊

空白期（1957～1965年）を経て、アメリカ軍の本格的介入が始まった1965年から青年突撃隊は戦時動員の組織として再開された。たとえば、タインホア省の青年突撃隊は、抗米救国の青年突撃隊設立を許可する政府首相指示71号の前になるが、1965年4月25日に設立されている¹¹。抗仏戦争期と異なるのは階級的出自があまり問われなくなったことと女性も青年突撃隊に動員されるようになったことである。1967年1月、北部抗米救国「青年突撃隊」競争大会に際して、ホー・チ・ミン主席はタインホア省とゲアン省の青年突撃隊隊員の青年男女が勇敢に戦っていることを称賛し激励する書簡を送っている。タインホア省では1965年から1968年の4年間で8万4390人の青年が人民軍隊に入隊したが¹²、ほぼ同時期の1965年から1970年までにのべ5万人が青年突撃隊に入隊しており、青年突撃隊は人民軍隊より入隊者数は少ないが比肩しうるほどの動員数をもっていた。後で詳しく見るように、青年突撃隊は直接戦闘に従事したわけではないが、道路・橋梁建設や管理・保全等の後方支援などで大きな貢献をした。軍隊に比べると戦死者は少ないものの、爆撃や事故による犠牲者も相当数出している。

3. 戦後の青年突撃隊と「旧青年突撃隊会」の成立

1975年4月にベトナム戦争が終結すると、青年突撃隊員を十分に吸収するだけの雇用先がなく、多くの人は恩給を受給することもなく、復員することになった¹³。長い間、元隊員たちは恩給の支給もなく、一部の人を除いてあまり顕彰されることもなく、元隊員の利害を代表する組織もなく、いわば政府から見捨てられてきた存在であったといえよう。党・国家が元隊員に関心を持つようになるのは1990年代に入ってからである。1995年6月30日、政府首相は、1950年7月15日をもって最初の青年突撃隊が成立した日だと決定した。1997年11月11日、国家主席は青年突撃隊に「人民武装勢力英雄」の称号¹⁴を贈った。1999年に政府はようやく青年突撃隊員に対する恩給制度などを解決する決定104号を出した（タインホア省「旧青年突撃隊会」主席のチャン・ディン・ラン氏の指摘）。2004年に政府と内務省は青年突撃隊を結集し組織化する方向を打ち出した。2004年12月19日、全国の元青年突撃隊員の代表250人余りが「旧青年突撃隊員会（Hội Cựu Thanh Niên Xung Phong）」の設立大会を進めることで合意した。設立大会は、約30万人の元隊員の結

¹¹ Hà Văn Khai, “Thanh Niên Xung Phong Thanh Hóa Trong Cuộc Kháng Chiến Chống Mỹ Cứu Nước”, *Thanh niên xung phong THANH HÓA*, Số 1/2005, p.52.

¹² *Ibid.*

¹³ 注9参照。

¹⁴ 「人民武装勢力英雄」を含む「英雄」の称号については、拙稿「ホー・チ・ミン時代の『英雄』たち—ベトナムにおける『英雄宣揚』と人民動員—」『東京外国語大学論集』第70号、2005年、を参照されたい。

集と、引き続き奮闘貢献し、若い世代を教育するための模範となるように呼びかけた¹⁵。旧青年突撃隊員会は2005年1月13日に祖国戦線の40番目の正式メンバーとして認められた¹⁶。旧青年突撃隊員会は2006年7月の時点で、36省で設立されており、2006年前半に8万4928人が加入し、会員総数は約18万人となった。これは元隊員全体の50%以上になる¹⁷。現在、恩給受給のために約3万4000人が書類申請中であるが未解決であり、数千人の元隊員女性が未婚で孤独に暮らしている¹⁸。タインホア省では2005年7月に会が設立された。旧青年突撃隊員会は「社会組織」と位置づけられ¹⁹、(1)「同隊」の情義活動を推進し、(2)歴史の証人を組織して、元隊員への行政的対応の遅れの解消をうながし、同時に元隊員の模範を示す競争運動を発動して、若い世代の教育に貢献することを目的としている²⁰。

青年突撃隊はベトナム戦争終結後も青年の「ボランティア」組織として存続しているが、戦時の頃の準軍事組織とは性格を異にするようになっている²¹。

III. 青年突撃隊の編成と活動

1. 青年突撃隊の編成

1950年7月に青年突撃隊の設立が決定されて、その組織運営は共産青年団に委ねられた。

青年突撃隊への入隊は「任意・志願」であるが、入隊に際しては選抜が行なわれた。ハノイ市ザーラム県のシンは同期では村で3人だけが合格したという。トゥオン(女)の住むハドン市キエンフン社では同期で10人余りが入隊した(ただし途中で4人が「逃亡」した)。村からどれくらいの人が青年突撃隊に動員されたかということ、フォンのハノイ市ザーラム県イェントゥオン社スアンズック村ではベトナム戦争期に青年突撃隊に入隊したのは25人で、社全体では約80人であった。タインホア省クアンソン県クアンティン社では約120人、隣接するクアンタン社は215人であった。

多くの隊員は入隊時には10代後半であった。ドゥオックの所属する大隊は最も若いのは15歳で、平均は19歳ぐらいだったという。入隊期間はだいたい1期3年とされていたようであるが、インタビューした男性9人の平均が4年、女性19人の平均が約3.5年、男女を合わせた28人の平均が約3.7年であった。シンのように病気のため、2年足らずで帰郷した場合もある。

出征前には訓練や研修が実施された。マイーは4日間、政治学習した。ドゥオックは3

¹⁵ *Nhân Dân* 19-9-2005.

¹⁶ *Nhân Dân* 9-1-2006.

¹⁷ *Nhân Dân* 12-7-2006.

¹⁸ *Ibid.*

¹⁹ ベトナム旧青年突撃隊会の規約で、「社会組織である」と規定されている。「青農工婦(Thanh Nông Công Phụ)」と総称されるホー・チ・ミン青年団、農民会、労働組合、婦人会および退役軍人会などは「政治・社会団体」とされ、各級の政権においてしかるべき発言権をもつが、「社会組織」はそこまでの政治的発言権をもたない。

²⁰ *Nhân Dân* 12-7-2006.

²¹ この点については次の新聞記事を参照されたい。Nguyễn Việt Phát, “Đa dạng hóa mô hình tổ chức và hoạt động của TNXP”, *Nhân Dân* 17-7-2006.

ヶ月訓練し、橋・道路建設について学んだ。ルイは2、3日、訓練を受けた。トゥオン（男）は1ヶ月間政治を学び、その後、橋の架け方を学んだ。ティエップは半月ほど訓練を受けた。フィエンは5日間政治学習し、その後3ヶ月軍事訓練を受けた。訓練期間はさまざまであるが、政治学習と業務に関する専門的訓練がなされたようである。

青年突撃隊の編成は、小さな方から小隊→中隊→大隊→総隊と軍隊風になっていた。シンのところは、10小隊で1大隊、5小隊ずつ男女となっていた。ルーは大隊の政治員であったが、ルーの大隊は145人で、4中隊を編成。1中隊は4小隊。1小隊は4組（1組3人）であった。フォンの大隊は最初206人いて、総隊のトップは人民軍隊の中佐だが、大隊長は青年団が選出していた。クイによれば、後に大隊長もみな軍人となった。後方支援の管理、作業計画、道路の設計などは一般的に作戦に関することであり、軍隊が指揮し、青年突撃隊は思想・組織面で指揮しただけだったという。このように青年突撃隊は軍隊を模して編成され、実際の指揮も軍人の下にある準軍事組織であった。当初、青年突撃隊の制服や帽子には軍隊のような星が付けられていなかったが、その後付けられるようになった（マイーやドゥオックの言）。もっとも青年突撃隊には軍隊のような階級はなかった。手当ては、大隊長からふつうの隊員まで1ヶ月5ドンで

区別がなかった（クイの言）。大隊には看護士がいた（男のトゥオンの言）。

青年突撃隊の特徴は男女混成であることだが、男女比はどのようなものであったのだろうか。マイーやシンのところはほぼ男女半々だった。ルーの大隊は145人で15人が女性だった。クイのところは、1つの小隊に6、7人の男性と数十人の女性がいた。グエットのところは女性が多く、男性は少なかった。ラムのところは125人中、男87人、女38人。トゥオン（女）のところは男女半々。このように女性の占める割合は隊によって異なったが、青年突撃隊において女性が相当の割合を占めていたことは間違いない。ベトナム戦争末期に隊員だったホイのところは男が少なく、女ばかりだったというが、戦争末期に近づくにつれ、女性の割合が増大した可能性が考えられる。

2. 青年突撃隊の活動

次に任務内容と赴任先をみってみる。ハノイ市のマイーの赴任先はゲアンとハティン、クアンビンで主に道路建設。シンはゲアンで道路建設。ドゥオックはハノイ近郊で道路・橋梁の保全管理。フォンはゲアンで道路建設。ルイとその上司のルーはハティンのラオス国境で道路建設。

ハタイ省のトゥオン（女）はタインホア、ハイフォン、ハノイ近郊、クアンビンなどで

浮き橋の建設。ティエップはクアンビンで道路建設。ホンはクアンビンで橋梁建設。

タインホア省クアンスオン県クアンティン社のカップ、ラム、グエット、トゥイ、クエット、タンはみんな同じ大隊で、クアンビンで道路建設。

タインホア省クアンスオン県クアンタン社のトゥオン（男）はチュオンソン山脈地帯で交通運輸関係。フンも同様で、ハタイで研修した後、ラオスで道路建設機械を運転した。ホイはホーチミン・ルート建設に従事し、ラオスに駐屯していたこともある。

乳牛牧場の人々はほとんどが 512 総隊 259 大隊に属し、ラオス南部で軍隊の賄い、經理などの支援業務に従事していた。

ルー自身の総括によれば、任務の第一は道路建設（ホーチミン・ルート）。第二は弾薬を運搬し、自動車で南部に移動する部隊に奉仕することであった。このように、この時期の青年突撃隊は、(1) 地元の交通の要衝（幹線道路や橋梁）の保全・防衛、(2) ラオスへの交通路の建設と「国際的義務」の遂行、(3) ゲアン省、ハティン省、クアンビン省からホーチミン・ルートに入る各省での後方支援、道路建設などを行っていた。

青年突撃隊の駐屯先で隊員たちは民家に宿泊するか、飯場で寝泊りした。民家に宿泊したのはマイー、シン、ドゥオック、トゥオン（女）、カップである。フォンはジャングルの

中の飯場で暮らし、雨が降った時が大変だった。ティエップも飯場。ルーの飯場は 145 人が住んだ。駐屯先は多くが辺陬の地のジャングルの中にあり、ルイのところは、病院まで 40～50 キロ、市場へは 20～30 キロあった。工事現場も宿泊先から遠く離れていることがあり、シンの所は 6～7 キロ、フォンの所は 5～6 キロも離れていた。

道路建設のやり方は手作業が主であった。マイー、フォンによれば 66、67 年ぐらいまで機械がなく全て手作業で、その後になってブルドーザー等の機械が導入されるようになった。ラムによれば、道路建設で一番難儀だったのは悪天候で、雨風の時は大変だった。二番目は米軍の爆撃だった。1967 年のある日、朝の 8、9 時から夕方の 4 時くらいまで間断なく爆撃され、多くの人が犠牲になり、ラムの隊は 7 人が死亡した。ホンによれば、橋梁建設は危険が比較的少なく、道路建設・保全是より危険だった。

勤務は特に道路建設の場合、爆撃を避けて夜間に行われることが多かった。シンは午後 3 時に食事をして、午後 4 時か 5 時に仕事に出、夜に仕事をして朝に帰り、昼間に寝た。ドゥオックの作業も主に夜だった。ティエップも昼間休んで夜に作業した。フォンも夜間に仕事をする事もあった。クエットは、昼間は爆撃があるので、夜間に軍用車を通す支援をした。そのため彼の仲間たちは「人間ガ

ードレール (cọc tiêu sống)」と呼ばれた。グエットは、その頃、みんなは現在どうしたら任務を全うできるか、自分の力を尽くせるかを考えるのみで、どんな天候でも、昼夜を問わず、働くことをおそれなかったという。

3. 青年突撃隊の生活

隊員の手当ては月5ドンで、当時だと砂糖1キロかタバコ1箱、あるいはフォー10杯分に相当した(ドウオックの言)。カップによれば、食糧は米の配給のほか、国がときどき干魚を支給したが、野菜などは自己調達した。ルイは1ヶ月に米21キロの配給を受けていた。ティエップのように、赴任地の方が北部より食糧事情がよかったとする人もいる。ホンもハノイでは1ヶ月に米18キロだけで空腹だったが、赴任地では21キロの配給で比較的食糧事情がよく、その上、食糧輸送車のおこぼれもあったという。

青年突撃隊の生活でつらかったことは、マイーにとっては飢えと寒さ、米軍の爆撃、宿泊所が雨などで水浸しになることであった。ルーが一番こわかったのは、空腹と米軍ヘリコプターの来襲だった。カップは、ジャングルの雨と蛭が恐ろしかった。ルイはホームシックと苦しさで泣いてばかりいた。ルイは山蛭(vái)と蛭(dia)が沢山いるのがこわかった。フォンの大隊は最初206人いたが、6ヶ月後には6人が健康を害して帰郷せざるをえ

なかった。フォンが病気で一番こわかったのはマラリアである。ルイによれば、マラリアや毒蛇に噛まれて死んだ人も多かった。ティエップはマラリアになり、髪の毛が抜け落ち入院したが、結局根治せず帰郷。ティエップはホームシックのためでなく、青年突撃隊の生活が苦しくて泣いた。ティエップが今でもよく思い出すのは、マラリアで寝ていた時と雨降りの夜と、空襲警報で濡れた服を着たままでいなければならなかったことである。ティエップは、「考えると今でもおそろしい」、「死がこわかった」と語った。ドウオックは疥癬に悩まされた。ホイのところでは、3分の2の女性が皮膚病に罹っていた。トゥオン(女)も苦しくて、帰れないのが悲しくて泣いた。インタビューした複数の女性が、青年突撃隊の生活が苦しくて泣いたと率直に話してくれたのが印象的であった。

逆に、ホイが最もうれしかったのは、同隊の人々の情誼であった。カップによれば、隊員は一家のように愛し合っていた。他の単位に異動する時には一同で泣いたという。クイは、除隊後25年間国家機関に勤務し退職したが、青年突撃隊で過ごした4、5年のことほど懐かしく思い出すことはないと言った。トゥオン(女)、ティエップ、トゥオン(男)は青年突撃隊に参加したことを誇りに思い、後悔していないときっぱり言い切った。

青年突撃隊も軍隊ほどではないが、犠牲者

を出している。マイーの大隊 198 人中の死者は 10 人以上であった。シンの大隊では 3 人が死亡。ドゥオックの大隊では 1 人が戦死で他の大隊では 6、7 人が戦死した。ルーの大隊には戦死者はいなかった。トゥオン（女）のところは戦死者はいたが少ない。彼女によれば、66・67・68 年は戦闘が激しく、帰還することができなかった。ホンによれば、橋梁関係は道路建設に比べたら犠牲者は少なかったが、1972 年は爆撃が激しく危険だった。クイは、死者の埋葬も棺が間に合わず、ビニールに包んだだけで埋葬したのが悔やまれ、同隊の犠牲者のことが今でも思い出されるという。クイの大隊は総勢 120 人で犠牲者は 20 人余り。クイの村はベトナム戦争期に 50 人が出征し、8 人が死亡した。そのうち青年突撃隊が 4 人で軍隊が 4 人と同数であった。

4. 教育機関としての青年突撃隊

概して青年突撃隊隊員の学歴は高くなかった。小・中学校卒がほとんどで高卒は少なかった。上述したように、そもそも青年突撃隊設立時は「労働者」を養成するための青年学校としての役割が期待されていた。ベトナム戦争期の青年突撃隊においても学びの場としての機能は保持され、「平民学務」と呼ばれる補習クラスが青年突撃隊内で組織されていた。タンによれば、戦争が激しくなればなるほど、平民学務クラスを組織し、各大隊で 2 人が教

員役になった。クイの単位は 160 人の隊員がいて、8 年生まで終えたのは 1 人で、7 年生も 3 人だけだった。それが青年突撃隊を終える時には、ほとんどの隊員が読み書きが上達していたという。フンのところでは、教室があり、1 週間に 3 コマの授業があった。ドゥオックは小学校を出ただけで入隊したが、隊内で中学校課程を修了した。

フォンによれば、通常は青年突撃隊は 1 期 3 年で、「年季明け」は「中級学校」（日本で専修学校に相当する）か大学で勉学する機会が与えられた。ホンも同様のことを指摘し、青年突撃隊の「義務」が終わると、任意で勉学を続けることができたという。その頃は「中級学校」を終えればたいしたもの、ドゥオックの村には 2 人しかいなかった。当時、「中級学校」を終えると 100 人の労働者をまかされたという。インタビューをした元隊員たちの中にも、除隊後、進学した人が多い。マイーは 7 年生途中で入隊し、除隊後「ハンハイ中級学校」などで学んだ。ドゥオックも 7 年生を出て入隊し、除隊後、タインホアで 3 年余り学び、建設労働者養成学校の教員になった。クイは除隊後ハイフオンの「中級学校」で学んだ。クエットも除隊後に菓学を学んだ。タンは高校生で入隊したが、除隊後、中央作文学校に入り、その後地方新聞記者になった。トゥオン（男）は交通運輸学校、フンは機械労働者学校に進学した。ホイは 10 年生卒で入

隊し、除隊後にハノイ総合大学で学んだ。今回インタビューした元隊員では唯一の大卒である。

青年突撃隊は比較的低学歴の隊員たちにとって学びの場となり、また進学を提供してくれる教育機関としての機能も有していた。

以上のように、ベトナム戦争期の青年突撃隊は直接的に戦闘に携わったのではなく、後方支援業務を遂行したが、編成は軍隊組織に倣い、また指揮系統にも職業軍人が加わる準軍事組織であった。組織的には男女混成で、女性の占める割合が高いのが特徴であった。また教育機関としての機能ももち、隊員たちにキャリアアップのルートを提供した。

IV. 青年突撃隊に入隊した経緯

ベトナム戦争期の青年突撃隊に入隊した人は、それぞれの事情を抱えていた。まずハノイ市ザーラム県イエントゥオン社の5人のケースをみてみよう（6番のルーは異質なので除外する）。男性1人は体が弱く、徴兵検査で不合格になったケースである。彼は軍隊に行くかわりに青年突撃隊に参加した。もう一人の男性は健康上の問題はないが、一人っ子だったケースである。男の子が一人しかいない場合、軍隊に入るのを免じられ、その代わりに青年突撃隊に参加したものである（一人っ

子の場合、北部の駐屯地に配置されることが多かった）。女性3人は男兄弟のいない姉妹だけか、男兄弟が軍隊に行けなかったケースで、その家から軍隊に行く人がいないのでその代わりに女性が青年突撃隊に参加したものである。

次にハタイ省ハドン市キエンフオン社の3人のケースをみてみよう。ティエップのケースは男兄弟がいないケースである。トゥオン（女）のケースは既に軍隊に入っている男兄弟がおり、ティエップとは異なる。本人は「青年団の呼びかけに応じて登録した」と述べているが、詳しい経緯は不明である。ホンの場合は、おそらく、フランスの黒人兵とベトナム人との混血児という「履歴」に問題があり、軍隊に入れず、その代わりに青年突撃隊に入ったものと推測される。

タインホア省クアンスオン県クアンティン社の6人のケースをみてみよう。男性2人は徴兵検査不合格によるもの。もう一人の男性は3人兄弟で2人の兄が軍隊に入隊し戦死と負傷ということなので、最後に残った男の子として軍隊への入隊を免除されたのであろう。女性3人のうち2人は軍隊に行っている兄弟がいるが、親がおらず兄嫁との暮らしで、家庭の事情から参加したと思われる。もう一人の女性は「兵士の写真が素敵だったので、学校をやめて参加」と、憧れから主体的に選択したと述べているが、詳しい背景は不明で

ある。

タインホア省クアンスオン県クアンタン社の3人と同省ティエウホア県クアンタン社の乳牛農場のグループについては、遺憾ながら、入隊の経緯についての話を聞きだすことができなかった。ただ、クアンスオン県のホイは異色の存在である。彼女は幹部の子弟で、青年突撃隊員のほとんどが小学校卒、中学校卒で参加しているのに、10年生を卒業（高卒）してから参加している。彼女は4人兄弟の2番目で上の姉は勉学中であった。家ではまだ戦争に貢献していないので、幹部の家庭は模範とならなければならず、1968年に総攻撃令が出てから、彼女が青年突撃隊に入隊することになったものと考えられる。ちなみに彼女は2年間の青年突撃隊勤務の後、ハノイ総合大学に入学している。

以上から、次のようにまとめることができる。青年突撃隊への入隊は原則として「志願」によるものであり、中には自らすすんで入隊した人もいたであろう。しかし全ての隊員がそうであったのだろうか。正規の兵隊として軍隊に入隊できなかった人、あるいはそれから除外されていた人たちの戦争貢献の場として青年突撃隊は存在していたのではないか²²。

具体的には、(1)青年男子で体が弱く、徴兵検査で不合格になった場合、(2)男の子がいず、家から最低一人は戦争貢献者を出すために女性が参加した場合、(3)混血児や階級成分など「履歴」上の問題があり、正規の兵士になれなかった場合、などの受け皿に青年突撃隊はなっていたのである。また(4)家に男の子が一人しか残っておらず、家系存続のため、危険な軍隊勤務を免除されるかわりに青年突撃隊に参加した場合もあった。

青年突撃隊は、青年を動員し教育する組織として抗仏期に設立されたが、ベトナム戦争期になると性別・階級別を越えて、軍隊から漏れた人々をも揃い上げる青年動員組織となった。青年突撃隊は当時の北ベトナム社会において、各家庭、各個人に対し戦争への貢献を求める社会的圧力が相当強くかかっていたことを示している。

V. 総動員体制の階層性

総動員体制の中で、青年突撃隊は人民軍隊には入れなかった層を吸収し、総動員体制の一翼を担った。上述したように、身体上の問題や「履歴」上の問題のある人は人民軍隊に

²² ズオン・フオンの小説『夫なき水辺』（1990年）は、抗米戦争中の農村における女性の結婚相手不足の問題を扱っている。小説の舞台となっているドン村では、抗米戦争中、若い男は17歳になれば1歳年齢を増し、徴兵検査に応じて軍隊に入ってしまう、残っている若い男性は、身体障害者か知的障害者、あるいは「逃亡兵」のみであった。「逃亡兵」はいくじなしだとけなされ、「誰もが私のようだと国は滅ぶ」と

いうプラカードをもって村の中を練り歩かされ、結婚相手としては身体障害者より人気がなかった、とされている。Duong Huong, *Bên không chồng*, Nhà Xuất Bản Hội Nhà Văn, Hà Nội, 1999, pp.140-141. このようなエピソードからも、当時の北ベトナム社会において戦争への動員圧力が強かったことが窺える。この小説ではまた、息子が「逃亡兵」となったために、有力者の父親がその地位を失い、妹は兄を恥に思い、その汚名を雪ぐために「文工」をやめて青年突撃隊に志願したという話ものっている。Duong Huong, *op.cit.*, pp.250-254.

は入れず、総動員体制の中でも差別は存在していたことがわかる。青年突撃隊は直接に戦闘することはないので、生命の危険は軍隊に比べると遥かに少なく、また選抜基準も緩やかであったので、軍隊の人たちからすれば一段低く見なされていた。インタビューの際、ティエップやホンが青年突撃隊への入隊動機を言いよどんでいたのは彼らの引け目を示すものであろう。とりわけ男性の隊員はそのようなことを感じざるをえなかったであろう。旧北ベトナム社会で流布していた「逃げた部隊 (bộ đội đào ngũ)」という俗言は、青年突撃隊への偏見が存在していたことの証左である。この俗言は青年突撃隊、とりわけ男性隊員に対して、正規の軍隊に入隊せず「逃亡」した卑怯者とする皮肉・蔑みを込めた言葉である。シンへのインタビュー中、同席していた夫(軍隊経験者)が茶化して青年突撃隊の男たちは軍隊を避けた「逃げた部隊」だといったのに対し、シンはそんなことはないと言気色ばんだ。シンの夫からは青年突撃隊を見下す態度が明らかに窺えた。人民軍隊と青年突撃隊との関係の中で見られるこのような階層性は、さらに軍隊内でも、後方支援業務に携わることの多かった女性兵士が男性兵士に比べて昇進が遅い傾向にあったこと(ただし軍医は除く)と重なるものがある。「前線」から「銃後」までの総動員体制は、「前線」の軍隊を頂点とし「銃後」を底辺とする階層性によって序列づ

けられ、「前線」へ収斂していく動員圧力がかけられていたのである。この圧力から逸脱した人、たとえば軍隊の「逃亡兵」は社会的制裁を受け、「前線」まで達しない青年突撃隊は軍隊を「逃げた」として見下されることにもなった。公式的見解の代弁者ともいえる現タインホア省「旧青年突撃隊会」主席のチャン・ディン・ランに青年突撃隊は「逃げた部隊」なのかと尋ねたところ、そのような言い方をされることもあるが、ベトナム戦争期には青年突撃隊に参加するのはとても荣誉だとされており、実際に青年突撃隊には任務から離脱した「逃亡者」もいたが軍隊に比べてもその数は非常に少なかったと反論した。しかし「戦後」において、荣誉の階層性が厳然と存在し、顕彰、恩給の受給等の待遇と関係団体の結成で青年突撃隊は人民軍隊に比べると劣った状態のもとにおかれている。「旧青年突撃隊会」と「退役軍人会」の待遇の違いを見ても、それは一目瞭然である。

VI. 復員後の青年突撃隊女性隊員

抗仏戦争では女性人口の 36.13% がゲリラ戦争に参加し、38.3% が軍隊に奉仕し、ベトナム戦争期には、北部の女性の 41% が軍隊や民兵などに参加したといわれる²³。このように多くの女性が抗仏・抗米の戦争に動員され

²³ *Viet Nam The War Of Liberation (1945-1975)*, The Gioi Publishers, Ha Noi, 2006, pp.189-190.

たわけであるが、青年突撃隊においても女性が相当数を占め、青年突撃隊が女性を戦争に動員する枠組みとして大きな役割を果たしてきたことについては上で見た通りである。しかしながら、戦場に青春を捧げ、大きな犠牲を払って戦争に貢献してきたにもかかわらず、復員後の青年突撃隊の女性隊員たちの辿った人生行路は必ずしも平坦なものではなく、むしろ険しいものとなった。彼女らがまず逢着したのが結婚問題であった。戦争中は「銃後」の女性たちが「婿不足」に悩んだが、戦後は青年突撃隊の女性隊員の結婚難が社会問題となった。

「戦後」ベトナムにおいて、未婚の独身女性の中で青年突撃隊出身者がかなりの割合を占めていることは、マスコミなどで夙に指摘されてきた²⁴。ベトナムの女性学研究者レ・ティによれば、中部クアンナム省ティエンフオック県では、ベトナム戦争中にラオス南部での戦闘に従事し、復員した時には適齢期を過ぎていたり、病気（マラリア等）に罹っていたため結婚できなかった女性が多数いる。ティエンフオック県の青年突撃隊隊員だった未婚女性は34人おり、そのうち17人に婚外子がいる。彼女らの多くは枯葉剤の影響を受けている。ティエンフオック県のティエンラップ社だけで26人の隊員出身の独身女性があり、やはりその多くは枯葉剤の犠牲者であ

る²⁵。北部のニンビン省ではベトナム戦争中に約5000人が青年突撃隊に入隊したが、その7割以上が女性である。彼女らの多くはラオス南部で道路建設に従事し、枯葉剤の影響を受けている。1999年の調査で、インタビューした160人の元女性隊員うち127人が復員後も未婚のままであった。32人は枯葉剤の影響を受けているが、そのうちの何人かは結婚して子どもを生んでおり、それらの子どもには障害のあるケースが多くみられる²⁶。

以上のような問題について、今回の聞き取り調査の中で本人たちの口から多く言及されることはなかった。81年に27歳で「遅く結婚した」ルイは、男性は青年突撃隊の女性とは結婚しなかったと指摘する。トゥオン（女）によれば、同じくらいの年だと自分たちは老けているし、年上だと既に結婚しているのでは、結婚が難しかったという。彼女は80年に12歳年上の男性と33歳で結婚した。ルイもトゥオンも、20歳そこそこで結婚することが多かったといわれる当時のベトナム農村の女性としてはかなりの晩婚である。ハノイ市ザーラム県イエントゥオン社イエンケー村のマイーは、インタビューの中で自身では語らなかったが、インタビュー後に調査基地のホアさん夫婦から聞いた話によれば、後妻として結婚したという。イエンケー村では元

²⁴ たとえば *Phụ nữ Việt Nam*, 28-6-1999.

²⁵ Le Thi, *Single Women in Viet Nam*, The Gioi Publishers, Ha Noi, 2006, p14.

²⁶ *op.cit.*, p.32

隊員が4人いて、そのうち3人が女性であるが、いずれも後妻であった。「通常」の結婚はなかなか難しかった状況が見て取れる。トゥオン（女）によれば、隊内で結婚相手を見つけた人もいるが、入隊中は認められず除隊後に結婚できたという。グエットは夫婦とも青年突撃隊員で、赴任地で知り合い恋仲になった。規律でおおやけにはできなかったのも、隠し通した。除隊後、夫は「鉄道中級学校」に通学するようになり、1年後に結婚した。グエットは幸運なケースであるが、復員後に未婚のままで年齢を重ねている元隊員女性が少なからず存在する。タインホア省ティエウホア県クアンタン社の乳牛農場はそういった女性たちが共同生活を営んでいる所であり、ザオのように未婚で養子をとっている女性も少なくない。また上述のクアンナム省ティエンフオック県のケースのように、婚外子をもつケースもある。

青年突撃隊の女性隊員が復員後、結婚したい状況におかれたのは、総動員体制のためのナショナルな規範とベトナム社会の現実との間に齟齬があったためである。ベトナム戦争中から流布していた「建設現場の若い女性、野戦病院のベッド、芸能人の頬、兵隊のお尻 (gái công trường, giường bệnh xá, má van công, mông bộ đội)」という俗言がある。この俗言は戦場での性的対象を示唆するもので、「建設現場の若い女性」とは青年突撃隊の女性を指

している。青年突撃隊の女性性は性的に乱れていて、純潔を失っているとの風評が広まっていたという。どうしてこのような風評が広まったのであろうか。まず、若い女性が一人で親元や郷里を離れて、村社会の束縛を脱して、村人の目の届かないところで数年間を過ごしてきたことが、彼女らに対して村人がいろいろと想像をめぐらす要因となった。ルイはハノイ近郊村に住んでいたが、青年突撃隊で出征する時までハノイにも行ったことがなかった。次に青年突撃隊が男女混成だったことである。「前線」は男性兵士が多数を占め、また「銃後」の農村では「婿不足」が深刻であったのに、青年突撃隊は例外的に若い男女がそろって身近にいた。またティエップやホンによれば、空襲時や大雨の時など、狭い飯場の中で男女が雑魚寝することも度々あったという。このようなことがさまざまな揣摩臆測をよんだのであろう。ハノイ市ザーラム県イェントウオン社イエンケー村で聞き取り調査をした時、調査基地のホアさん夫婦がこの風評の存在を教えてくれた。しかし、インタビューの中で元隊員たちは、男女間のことについて語ることは殆どなかった。2005年に『ダン・トゥイ・チャムの日記』²⁷がベストセラーになってから、戦争中の兵士の恋愛が注目され、戦争への犠牲的奉仕と純愛を貫くこと

²⁷ Đặng Thùy Trâm, *Nhật Ký Đặng Thùy Trâm*, Nhà Xuất Bản Hội Nhà Văn, Hà Nội, 2005.

が重ねられ、肯定的に描かれるようになったが、元隊員たちは青年突撃隊では恋愛は禁じられていて、隊内での男女関係はなかったと口を揃えて強く否定した。いずれにしても、青年突撃隊の女性隊員は復員した時、戦争に貢献してきた「英雄」的側面を称揚される一方、上述のような風評による白眼視に耐えなければならなかったのである。先にも述べたが、ルイによれば、復員した女性隊員との結婚が望まれなかった理由の1つは、青年突撃隊での勤めを終えて帰ってきた時には、当時の平均的結婚年齢と比べて高くなっていること、2つにマラリアなどの病気に罹っていること、3つに上述の風評・偏見であった。

ベトナム戦争中、北ベトナムでは婦女連合会によって「3つの担当 (Ba đảm dang)」運動が1965年3月に発動された。「3つの担当」とは、女性が(1)生産任務を担当し、出征した男性に代わって工作をする、(2)夫や子供、兄弟が戦闘に行けるように家のことを担当する、(3)戦闘への奉仕、戦闘への準備を担当することである。「3つの担当」運動は1965年5月末には170万人の女性が参加する広範な運動となり、ベトナム戦争の勝利に大きく貢献したといわれ²⁸、ベトナム戦争中の最も

代表的な女性運動となった。「戦後」になると、主に青年突撃隊の元女性隊員たちを指して、「3つの担当」をもじって「3つの喪失 (Ba nhớ nhàng)」(1)家をもてない、(2)夫をもてない、(3)子どもをもてない)と巷で皮肉がいわれるようになった。抗仏戦争期と異なり、ベトナム戦争期の青年突撃隊は女性も含めた組織になった。そのため多くの女性が隊員として参加した。復員後、病気や負傷等々、男性隊員も女性隊員も多くの代償を払わなければならなかったが、女性隊員はさらに結婚問題という代償を払わなければならなかったのである。男性隊員についてはそのような問題があったとは聞いたことがない。「外国の侵略がある時には、女性でさえも戦う」ことはベトナムのよき伝統としてよく引き合いに出されるが、その「つけ」は戦った女性により重く押し付けられてきたのである。

見ない、知らない。(2) ホーチミン・ルートを切り開く勢力や他の勢力の行軍や駐屯の機密を守るために、痕跡を残さず行軍する、煙をたてずに炊炊きをする、声を立てずに話す。III. 「3つの一番 (Ba Nhất) 運動」は人民軍隊と自衛民兵の競争運動として1960～1963年に実施された。(1) 一番多くの成績をあげる、(2) 最も満遍なく成績をあげる、(3) 一番の品質で成績をあげる。IV. 「3つの決心 (Ba Quyết Tâm) 運動」はベトナム祖国戦線によって1966年6月に発動されたもので、知識人を対象にした運動。(1) 生産・戦闘・生活に奉仕する決心、(2) 技術・思想・文化の革命を推進する決心、(3) 社会主義的知識人の隊伍建設を推進する決心。V. 「3つの用意 (Ba Sẵn Sàng) 運動」は北爆が開始された直後の1964年8月から青年団によって発動された。(1) 戦闘を用意し、勇敢に戦闘し、人民武装勢力に参加する、(2) あらゆる困難を克服し、生産・学習・工作を推進する用意をする、(3) どこにでも行き、祖国が必要とするどんな仕事もする用意をする。この運動は北部の青年を対象としており、南部の「5つの突撃 (Năm Xung Phong) 運動」と並んで、ベトナム戦争期の代表的な青年運動。BỘ QUỐC PHÒNG, *op.cit.*, pp.40-41.

²⁸ Bộ Quốc Phòng, *Từ Điển Bách Khoa Quân Sự Việt Nam*, Nhà Xuất Bản Quân Đội Nhân Dân, Hà Nội, 2004, p.39. ベトナム戦争中は「3つの」を冠した幾つかの運動が展開された。I. 「3つの巧み (Ba Giỏi) 運動」は1966年にベトナム父老会が提唱。(1) 巧みに生産・節約する、(2) 巧みに戦闘に奉仕する、(3) 巧みに政策を執行する。II. 「3つの無 (Ba Không) 運動」は(1) 敵方の諜報活動に対抗し機密を守るために、聞かない、

おわりに

青年突撃隊は、人民軍隊より一段低く見なされていたが、正規兵以外の青年男女を戦場に動員し、「ムラの若者」から「くにの若者」へと改造していった²⁹。しかし復員後、とりわけ女性隊員はナショナルな規範と伝統的なムラの規範との間の齟齬に苦悩させられることもあった。「くにの若者」は「ムラの若者」を払拭しきることはできなかったのである。

青年突撃隊に関して国内の公の場で最も喧伝されている表象は、「ドンロックの三叉路の10人娘」であろう。中部ハティン省カンロック（Can Lộc）県にあるドンロックの三叉路（Ngã Ba Đồng Lộc）は、南ベトナムへの供給ルートとして要衝の地であり、米軍の空爆も熾烈をきわめた。ここで補給路確保、不発弾処理などに従事していた青年突撃隊に属す20歳前後の若い女性10人が米軍の空爆で1968年7月24日16時40分に犠牲となった。これらの若い女性10人を追悼して翌年の1969年9月31日にはハティン省文化局により慰霊碑が建てられ、北部を防衛する青年突撃隊と民兵の象徴的存在として祭り上げられた。戦後の1976年には彼女らに関する本が出版され³⁰、後に映画も製作された³¹。彼女らが埋葬されたところには、戦後に立派な墓地と

慰霊碑が建立され、近くには1998年にホーチミン共産青年団によって、全国青年突撃隊記念館も建設されている³²。このようにドンロックは、純粋に自らの生涯を戦場に捧げ、勇敢に戦い、英雄的に犠牲となった若い女性および青年突撃隊を顕彰する最も代表的な表象となった。青年突撃隊自体も1997年に「人民武装勢力英雄」に認定され、全国で隊員数が最も多かったタインホア省では、2005年に青年突撃隊戦勝記念碑が建立されている。これらはいわば青年突撃隊に関する公式的で厳粛な語りの青年突撃隊像を構成している。

一方で以上のような青年突撃隊像とは異なるヴァナキュラーな言説も存在している。上に述べた「逃げた部隊」「建設現場の若い女性、野戦病院のベッド、芸能人の頬、兵隊のお尻」「3つの喪失」もその一例である。今回の聞き取り調査では、公式的で厳粛な語りとともに、このような語りにも出会った。それはだいたい語り手本人が自分のことを語る中からではなく、第三者の語りあるいは仲間内の話として語る中から出てきた。「公式的記憶」と個人的な語りは厳粛で真面目な語りがなされるという点ではむしろ共通するかもしれない。第三者の語りや仲間内の語りの中では揶揄・茶化し・冗談などが入りやすく、ヴァナキュラーな言説が表出しやすいのではなかろうか。

²⁹ 岩田重則『ムラの若者・くにの若者』未来社、1996年。

³⁰ Nguyễn Văn Tân, *dài hoa tím*, Nhà Xuất Bản Phụ Nữ, Hà Nội, 1978.

³¹ 映画のタイトルは“Ngã ba đồng lộc”（Lưu Trọng Ninh 監督、1991年）。

³² Nguyễn Văn Tân, *10 Cô Gái Ngã Ba Đồng Lộc*, Nhà Xuất Bản Phụ Nữ, 2006, p.217.

上に挙げたようなヴァナキュラーな言説は、
「公式的記憶」の一面性を補い、「公式的記憶」
では触れられることが少ない体制内差別、性
的話題、悲しみの吐露等を表現しているが、
必ずしも「公式的記憶」を否定する「対抗的
記憶」になっているわけではない。ヴァナキ
ュラーな言説を述べた本人たちは、現状にさ
まざまな不満を抱えつつも、多くは今でも熱
烈な「抗米救国戦士」なのだから。

(いまい あきお・東京外国語大学)